

論文の要旨

論文題目 現代日本語の非断定的表現 - 「そうだ」、「げ」、「っばい」を中心に -
氏名 Tatiana Yurievna Kekidze
学位 博士(文学)
授与年月日 平成 15 年 3 月 25 日

本研究は、現代日本語の「(し) そうだ」、「げ」、「っばい」という形式の意味分析を目的とした論考である。

本研究は、Fillmore (1982)、Lakoff (1987)、Langacker (1987)などの提唱する認知言語学の枠組みに基づいている。この枠組みでは、従来の客観主義的言語学とは異なり、言語表現の意味を、現実世界の事物や事象を直接反映するものとしてではなく、話し手がどのようにとらえたかを反映するものとして、つまり、概念として考える。この言語観の妥当性は、「上り坂」と「下り坂」のように客観的には同じ事象を表わしている異なる形式を、話し手のとらえ方の違いとして一貫性ある意味論の中で説明できるところにある。客観主義的言語学では、この違いは一貫性を持って説明することができない。

客観主義的な言語観の問題点についてはすでに Lakoff (1987) などが批判しており、自然科学の中でさえ人間の主観を認める動きがある。しかし、現在でも、人間の主観を排除してはじめて「学問らしい」研究ができると考える研究者が多く、言語学において客観主義は依然として根強い考え方である。そこで、本研究では、人間を排除しては人間の言語を妥当に説明することができないということを具体的な例を挙げて示した。

認知言語学の枠組みは、ソシユールの言語観とも対立している。ソシユールの言語観は、言語表現の意味を、話者からも現実世界からも独立して言語体系内の差異によってのみ決定されるものとしてとらえる。つまり、言語が今あるようなものとしてあらかじめ存在するという事実から出発しているために、その言語が話者による現実のあるとらえ方を反映するという事実気付くことはできない。この言語観の問題点は佐藤 (1986) などによってすでに指摘されている。しかし、ソシユールの言語観は現在でも根強く残っている。この点について本研究では、「(し) そうだ」などに関する先行研究の批判を通して論証している。

認知言語学の枠組みに立つと、先行研究がまだ十分に説明できていない各形式の意味の違いを説明することができる。またその意味分析を通して日本語話者に共通する現実世界のとらえ方に迫ることができる。

まず、「そうだ」に関する本研究の分析をまとめる。この形式に関する先行研究のほとんどは、認知プロセスの対象である「現実」と言語表現の意味を、話者を介さずに直接結び付け、「そうだ」を支える概念操作に注目していない。一方、本研究では、背後にある概念操作に注目して、「そうだ」を支えたとらえ方を明らかにすることを試みた。分析の結果、「そうだ」の背後には、ある特定の方法で構造化された知識（[複合体]）があることが明らかとなった。その[複合体]は、ある事態 A が別の事態 B の「成立条件（の一つ）」となるような形で構造化されている。「そうだ」の背後にあるこのとらえ方は日本語の慣習単位となっている。したがって、その[複合体]を構成している認知的操作は、「そうだ」を用いるたびに、いちいち意識される必要はない。しかし、意識されていないからといってそのような操作が行われないわけではない。本研究では、言語事実に基づいて「そうだ」を使用する際にそのような操作が行われていることを示した。

次に、本研究では、今まであまり注目されてこなかった現代日本語の「げ」の意味分析を行った。現代日本語では、「げ」と共起できる語が慣用的に決まっている場合が多い。そこで本研究では、Langacker（1987）の使用依拠モデル（usage-based model）がこのような制約の多い形式を説明するのに有効であることを示し、その上に立って「げ」の意味記述をした。考察の結果、この形式が「ある内的特徴の現れと一般にみなされるような表面的様子」を表わすことが明らかとなった。

本研究が対象とした最後の形式は「っばい」である。本研究では、まず、「っばい」の安定した用法（「黒っばい」や「子供っばい」など）を分析した。その結果、「っばい」の安定した用法は、X が属性を表わす場合を基本義として、5 つに分類できることが明らかとなった。それぞれの用例は、「黒っばい」（基本義）、「安っばい」、「子供っばい」、「埃っばい」、「怒りっばい」である。

次に、安定した用法の分析を踏まえて、話し言葉で頻繁に用いられるこの形式の新奇用法（「それ、橋っばくない？」や「不安っばい」）をも記述し、安定した用法との関連性を示した。これを考察の対象としたのは、この形式が日常会話では特に目立って用いられるからである。さらに、「っばい」に限らず新奇用法一般についても「乱れた日本語」として否定するのではなく、日本語話者の表現心理を反映しているものとして記述する必要があることを示した。

ここで特に指摘しておきたいのは、話し言葉を本来の用法と切り離して考察するのは無意味だということである。なぜならば、「乱れた日本語」と言われるものも、実際は既存の意味に依存して、そのある一面だけを利用して使われているからである。この新奇用法がどのような心理的動機から生じているのかをもとの意味を踏まえて明らかにしない限り、話し言葉の特徴は明らかにされたとはいえない。

最後に、断定を避け表現をやわらげるという現代日本語に見られる傾向に注目した。「やわらげ」については、「そうだ」、「げ」、「っぼい」のみならず、「ようだ」、「めいた」、「かもしれない」をも取り上げ、この方略が現代日本語に顕著に見られるものであることを示した。表現の「やわらげ」は、これらの形式の本来の用法ではない。しかし、本研究は、このような派生的な用法はあくまでも本来の用法との関連で考察すべきだという立場をとり、この立場から考察を行なった。